引用されたのであろう。口腔疾患におけるこれらの傾向は『医心方』全体の傾向と一致するものである。

（鶴見大学歯学部）

『小品方』の処方について

広田　曄子

『小品方』は紀元五世紀頃、陳延之によって著された処方集である。『小品方』から『外台秘要方』および『千金方』に引用された処方について分析を試みた。

㈠『小品方』から『外台秘要方』および『医心方』に引用された処方の構成生薬の数

灸や呪術などを除いた生薬による治療で、『小品方』から『外台秘要方』および『医心方』に引用された処方数は全部で五一二処方であった。内服は三八二処方、外用その他は一三〇処方であった。内服では煎剤が一九二処方であるのに対し、丸散剤は一九〇処方とほぼ同数である。

また、単方は五一二処方中の二七三処方であり、半数以上である。このように単方が多く引用されるのは、唐以前の医書から単方が多く引用される傾向と一致する。

小児門についても、『外台秘要方』や『医心方』への『小品方』からの引用処方は、内服は二〇、外用は一六であり、また、構成生薬の数も最高は一一であって全体に比べるとあまり複雑な処方は引用されていない。

㈡『小品方』から『外台秘要方』および『医心方』に引用された処方の文献別構成生薬の数

『小品方』から『外台秘要方』に引用されたのは二九七処方であり、そのうち単方は一三六処方である。また、『医心方』に引用されたのは三一五処方であり、単方は一九六処方である。『外台秘要方』と『医心方』へ『小品方』から引用された処方の中で、『千金方』にも記載のあるものは二〇一処方であった。『千金方』には引用文献の記載がないので、実際に『小品方』から『千金方』にどれほどの処方が引用されたかは、右のような方法によって推定するしかないわけである。それでも『医心方』や『外台秘要方』に引用されている処方で『千金方』にも記載がみられるものが二〇一もあるということは、『小品方』の処方のうちのかなり多くが『千金方』に伝えられたことを示している。

『医心方』に記載された『小品方』からの処方のうち、単方の占める率は三一五処方中の一九六処方である。『外台秘要方』では二九七処方中一三六処方、『千金方』では二〇一処方中一〇〇処方である。『医心方』では『小品方』からの引用に単方がより多いことがわかる。この傾向は小児門中の処方では更に著しく、『医心方』では単方の占める率は一八処方中一三処方もあるが、『外台秘要方』では二八処方中一五処方、『千金方』では一九処方中一〇処方である。また、『小品方』から『医心方』小児門に引用された処方では五つ以上の構成生薬から成る処方は一つもなく、構成生薬の数の少ない処方が採用された傾向にある。

また、『医心方』には『小品方』から引用したと記載された処方で、『外台秘要方』では『小品方』以外から引用された処方の出典を調べてみると、『千金方』からのものは全五二のうち一九であり、最も多い。逆に『外台秘要方』には『小品方』から引用したと記載された処方のうち、『医心方』では『小品方』以外から引用された処方の出典では、やはり『千金方』からの引用が最も多く、三九

のうち一一の引用がある。また、これらの『小品方』以外から引用されている処方の単方の占める率は『外台秘要方』では五二回の記載のうち三六回、『医心方』でも三九回の記載のうち二六回である。このことは、二つ以上の文献に記載され、比較的多くの本にみられる処方には単方が多いことを示している。また、七世紀までの主要な医書のうちでは『千金方』に最も多く『小品方』の処方が引用されていた可能性が高いことを示している。

まとめ

『小品方』から後世の医書に引用された処方の構成生薬は単方が多く、その用法は多種であり、内服と外用の比は三対一で、内服では煎用と丸散剤とがほぼ同数である。

『小品方』の処方は、七世紀以前には『千金方』に最も多く伝えられた可能性が高い。そしてそれらの処方は救急用の処方などが多く、単方が多い。『医心方』、『外台秘要方』、『千金方』といった医書には、救急時に簡単に処方できるものが『小品方』から選ばれた可能性が強い。この傾向はとくに小児門で強くみられる。

（開業）

書籍目録に見られる一七世紀後半の流通医書

平馬直樹

日本の伝統医学の発展史において、一七世紀の後半は、後世方派医学の確立期と古方派医学の興隆期のはざまにあって、一見歴史的意義の乏しい時期のように見える。しかし、この時期は中国医学の受容と普及の面で、飛躍的な発展を見た時期とも言える。

一六三九年までにいわゆる鎖国体制が完成し、対外交渉は厳しく制限されたが、江戸初期には積極的に中国文化の移入が計られた。その媒介となるのは、殆ど書物のみに限られた。この時代の日本の医学の姿を知り、さらには一八世紀以降の独自の発展を理解するためには、当時の医家がどのような医書を学習していたかを把握することが重要である。

江戸時代前半の目覚しい文化の発展の一要素として見過